

一病息災

長田 瑞恵

入院

一歳七か月のときに、娘は風邪をこじらせた肺炎で、初めて入院しました。発熱してからわずか一日半の間に容態が悪くなり、大きな小児病院へと駆けつけたのでした。

入院初日、必要な処置を終えて病室へ運ばれてきた娘は、細い腕に点滴の管をつけ、顔には酸素マスクをはめた痛々しい姿でした。

「充分に気をつけていたつもりだったのに……」。

小さな体で一所懸命つらい治療に耐えている姿に、親として自責の念を感じながら娘の看護を続けました。病院は完全看護であったため、夜間、親は帰宅しなければなりません。まだこんなに小さな娘が、体調も悪いのに親と離れて夜を過ごすのはどんなに心細いだろうと思うと、親のほうが切なくて、思わず涙ぐみながら帰宅する毎日でした。

娘のいない家の中は妙に静かで寒々しく感じました。寝室に畳まれた娘の布団を眺めていると、

普段は当たり前のように思っていた「家族そろっての生活」がどんなに幸せなことなのか、痛いほど思い知らされたような気がしました。

娘は一週間ほどで退院することができました。

退院後の娘は以前にも増して元気で陽気になり、入院中の分を取り戻そうとしているかのように、たくさん話し、笑い転げ、おどけてみせるようになりました。その姿に安堵しながら、改めて家族そろって過ごせる時間を大切にしていこうと思ったのでした。

元気なはな垂れ小僧

入院騒ぎでは肝を冷やしましたが、普段の娘はかなり丈夫です。暑がりの夫に似たのか、冬場でもあまり寒そうなそぶりは見せません。春先や秋口は、布団から転がり出て眠っている娘に寝冷えをしてはいけなないと布団を掛けてやると、「暑

い！」と言わんばかりに布団を蹴散らして、また転がっていきます。保育園でも薄着をさせる方針らしく、夏場はランニングシャツ一枚だけ、冬の間も寒がりの私から見ればびつくりするような軽装で遊んでいました。

そんな「風の子」の娘ですが、日中の大半を集団の中で生活していることもあり、風邪がはやり始めると、どうしても風邪をもらってしまいます。

生まれて初めての冬は、秋口に引いた風邪がすぐに完治することなく、次の春を迎えてしまいました。重症化することはあまりなかったのですが、せきと鼻水はもはや持病なのではないかと思うほど、なんとなくすつきりと治りきらないままでした。

母親としては娘に風邪を引かせてしまうことに責任を感じ、食事や服装などにそれなりに気を使っています。しかし、それも限界があるよう

で、気がつくとも娘の鼻の下は鼻水ででかてかになつてしまつています。

ところが、娘は風邪を引いてしまつても、意外と元気に過ごします。多少熱っぽくても、大きな声で歌をうたつたり踊つたり、時には外へ遊びに出たいと訴えることさえあります。のどが痛そうでも、食欲が落ちることもほとんどありません。

人の成長の過程では、すべてのストレスを避けることはできません。むしろ適度に刺激にさらされることで、より強く、よりしなやかに育つていくと言われていきます。風邪を引きながらも、毎回それを乗り越え、そのたびに一回りずつ大きくなつていく娘を見ると、子どもの生きていく力のたくましさを感じます。

私は心のどこかで「乳児は弱いもの、守つてやらねばならぬもの」と必要以上に心配してしまふところがありますが、そんな過保護な私を笑い飛ば

ばすように、娘は鼻水を光らせながら元気に走つていきます。

法則

育児休業が終わつて職場復帰したところに、職場の女性の先輩たちからたびたび言われたことがあります。それは、「忙しいときに限つて子どもが熱を出す」という法則でした。そのときは「そんなものかしら」という程度にしか考えませんでした。だが、すぐにそのことを実感する日々がやつてきました。

私の職場では、ある時期に大切な業務が集中します。職場復帰してしばらくしたころ、私は例年と同じように多くの仕事に追われるようになりました。そして、先輩たちの予言どおり、仕事が一番忙しくなつてきた時期に合わせるように、娘が風邪を引き始めたのです。

そのころの育児日記を読み返してみると、毎日のように「せきがひどい」「夜中に吐く」「便がゆるい」など、娘が体調を崩していたことを示す記述が続いています。病院へ連れて行った記録も毎週のように見られます。多いときには一週間に三回も複数の診療科にまたがって連れて行ったこともありました。

娘は体調があまり良くなくてもほどほど機嫌良く遊ぶのですが、やはり熱があるときには保育園にお願ひするわけにはいきません。娘と家で過ごすために、夫と交代で仕事を休まざるを得ない日が続きました。二、三日家でゆっくり過ごす娘の体調も落ち着き、また保育園に通えるようになります。しかし、しばらくすると次の風邪ももたらしてしまい、せきと鼻水が始めるのです。最初の一年、特に冬の間はこのパターンの繰り返しでした。

この話を子育てしながら働いている女性の友人たちにすると、皆、口をそろえて「保育園に入った最初の年は、半分くらいの日数でも保育園に行けたら充分よ」というようなことを言います。娘はそれほど休みがちだったわけではありませんが、それでも一週間まったく休まずに通えることは多くはありませんでした。

決断

わが家は核家族です。夫も私も実家が遠いため、子育ては基本的には夫婦の力だけで何とかするしかありません。娘が元気なときにはそれでもまったく問題はありません。娘は保育園でのびのびと生活し、私も日中は仕事に専念できます。しかし、娘が体調を崩して長引き始めると、いろいろなところに調整が必要になってきます。

私の暮らしている自治体では病児保育の体制が

「整っていないため、娘が病気のときには自宅でごすしかありません。娘の具合の悪いときくらい親がそばにいてやりたいという思いは強いですし、娘のためにもそれが良いのだろうとも思います。」

しかし、たとえば、「娘の体調は回復してきたけれど、保育園に行けるかどうかはもう少し様子を見たい」という状態のとき、「二時間だけ、私の講義の間だけでも、娘を見ていてくれる人がいたなら……」と思うことがしばしばありました。それでも一年目は誰かに手助けを求めることはせず、夫と二人だけで奮闘しました。

そして最初の冬を越え、二度目の春になったとき、私たちはある結論にたどり着きました。

「これから先も、二人だけで何とかしようとするのは、無理だ」。

こんなことは出産前からわかっていたことでした。夫も私も生まれ育った土地から離れているた

め近所に知り合いも少なく、しかも私もフルタイムで働いているため、夫婦二人だけの子育ては厳しいだろうということは容易に予想できました。そのため、出産後すぐにベビーシッター派遣会社と契約を結びました。

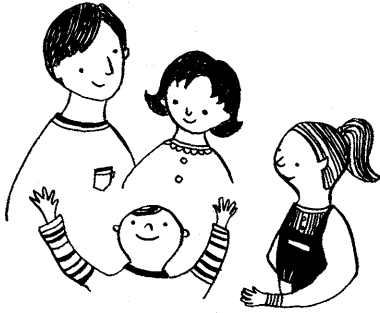
しかし、手助けが一番必要だった最初の冬の間、私たちはベビーシッターを頼みませんでした。頼まなかったのにはいろいろな理由がありました。頼まなかったところ、私たちは「自分たちだけで何とかできる」と過信していたのかもしれない。

最初の冬が終わるころに、ようやく自分たちの無謀さを悟った私たちは、ベビーシッターを頼むことにしました。娘が本当に具合の悪いときには私たち親がそばにいますが、回復してきたけれど保育園にはまだ行けないという状態のときには、いつも同じベビーシッターに来てもらうようにし

ました。

実際には、二度目の春以降は娘もひどい風邪をさほど引かなくなり、ベビーシッターを頼まなければならぬようなことは数えるほどしかありませんでした。しかし、ベビーシッターを頼むと決めたことで、私たち親の側に心の余裕が生まれたような気がします。そして、娘の側からすれば、親以外にも信頼し安心できる大人が一人増えたこととなります。

娘はいつも来てくれるベビーシッターが大好きで、ほかの子どもがベビーシッターのひざに上がると嫉妬して大騒ぎする



ほどです。

子育ての中心は親である夫と私であり、親の立場はほかの誰にも代われません。「親しかない」「親にしかできない」ということも多いと思います。しかし、時にはほかの人の手を借りていくことで、親にも娘にも、余裕と安らぎが生まれるものなのだと思います。

娘を妊娠していたころには、とにかく健康に生まれてほしいと願っていましたが、娘は私の期待以上に健康な体に恵まれて生まれてきてくれました。まずはそのことに心から感謝しながら、時々鼻水が光っている娘の鼻の下を、そっと拭いてやります。

健康な娘からも、体調の悪い娘からも、いろいろなことを教えられる毎日です。

(十文字学園女子大学)